

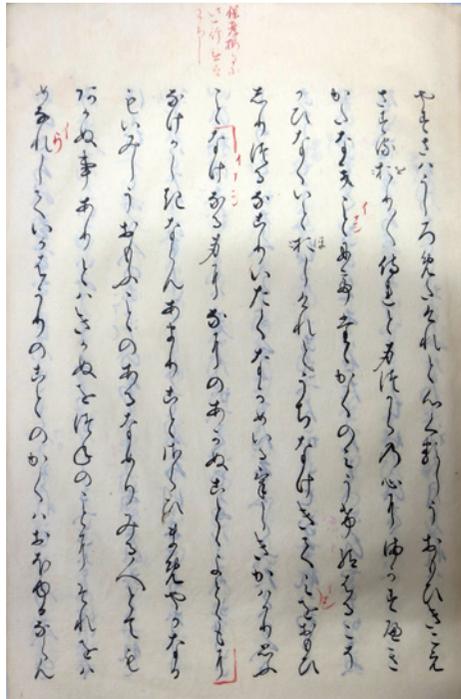
『とりかへはや物語』（九州大学附属図書館 音無文
庫蔵）

田島, 智弘
九州大学大学院 : 修士課程

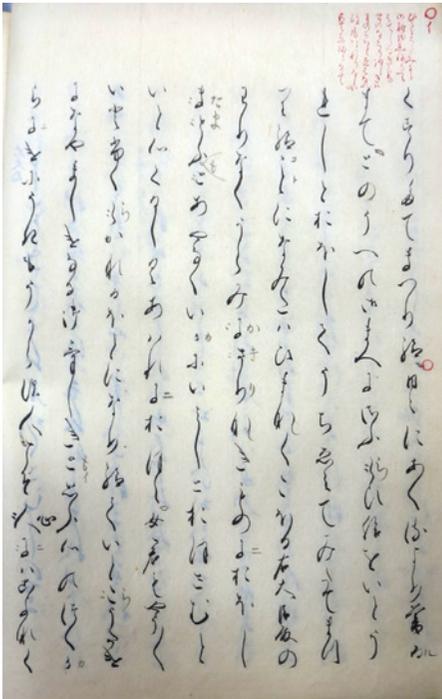
<https://doi.org/10.15017/3077263>

出版情報 : 文献探究. 57, pp.1-, 2019-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

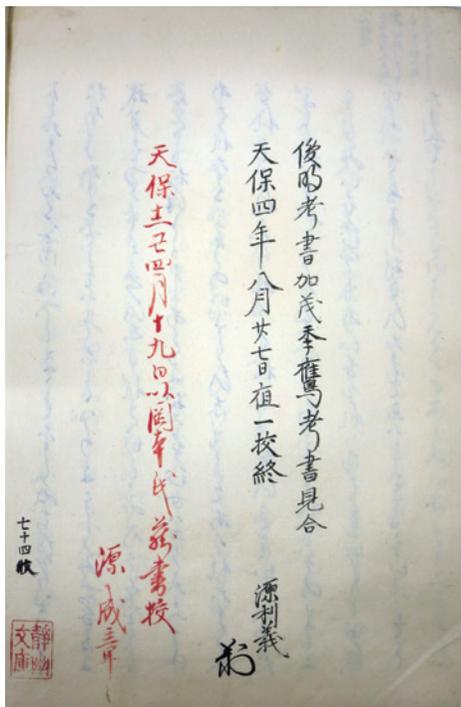
『とりかへはや物語』 (九州大学附属図書館 音無文庫蔵)



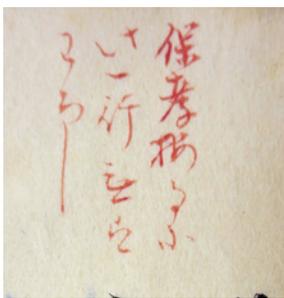
①第一冊 21丁表



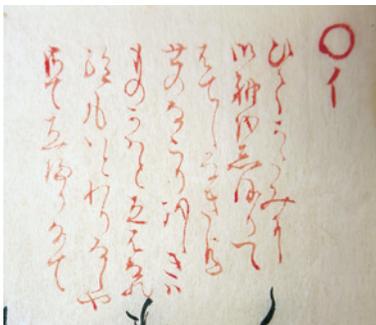
②第三冊 4丁裏



第一冊 奥書



①拡大図



②拡大図

解説

田島智弘

今回紹介するのは、九州大学附属図書館音無文庫に所蔵される、四冊本の『とりかへばや物語』である。

『とりかへばや物語』（古本『とりかへばや』は散逸し、改作本が『とりかへばや物語』と呼ばれる）は、写本のみ残存し、その書写年代は近世までしか遡れないが、その残存状況は一〇〇本以上と、意外にも多くの本を確認できる。その諸本系統は、四種に分類されるとするのが通説だ。それらの本文間に大きな異同がほとんど見られないなか、異彩を放っているのが、いわゆる「浚明本」系統である。近世中期の国学者・山岡浚明によって校訂された本文であることからこう呼ばれる。この浚明本は、特に浚明による詳細な注釈が為されていることにその価値がある。かつては鈴木弘道氏が、内閣文庫所蔵東山人芳齋筆本を底本とした翻刻本を『浚明本とりかへばや』（むさし書房、一九六九年）として出版しているが、その解説に「いづれが原浚明本に忠実であるか速断はできないけれども、原浚明本が書写されるにつれて、その書写者の増補や削除が多少生じたのではないかと考へられる」とあるように、本文の異同は少ないものの、その注釈内容に様々な差異が生じているのである（西本寮子「『とりかへばや物語』伝本考―浚明本系の伝本をめぐって―」（『広島女子大学文学部紀要』二九号、一九九四年）などにも詳しい）。

本書は浚明序文をもつことから、浚明本系統に属すると判定される。奥書によれば、天保四年（一八三三）に源利義が校合したと書かれるが、利義については未詳。さらに、天保十二年には国学者・源成章による「岡本氏蔵書」との校合がおこなわれている。「岡本氏」とは、近世後期の注釈書『取替ばや物語考』（以下『考』）を執筆した、国学者・岡本保孝であろう。というのは、本書の朱書注が証拠となる。朱書注には、内容や表現に関する注釈と、本文の異同に関する注釈が含まれる。その前者について、二十五箇所が『考』の注釈と一致、また、ほぼ同様の注釈も数箇所認められる。すると、「岡本氏蔵書」の岡本氏とは保孝であることがほぼ確かであろう。さらに、『考』の成立はその奥書によれば安政五年（一八五八年）であるから、「岡本氏蔵書」とは、『考』の草稿である可能性が高い。本文「なけなる身になにのあかぬこと、よと、もに」の部分に、『考』には見られない「保孝按るに此二行無之わろし」（口絵①拡大図）という注釈があるのも、保孝による『考』以前の『今とりかへばや』研究の痕跡を見ることができるといえる。

では、本文異同に関する朱書注はというと、こちらも興味深い書入れがある。異文注記の中で特に長い文章が書き入れてある六箇所については、国学者・伊藤光中による校訂本の本文とことごとく一致する。光中による『今とりかへばや』注釈は、近年新居和美氏による一連の研究によりその全貌が明らかにされており、この異文注記についても、そのほかの諸本には見られない特異なものであることが論じられている（『『とりかへばや』諸本分類考―改作本系統』の位置付けについて」（『中古文学』七八号、二〇〇六年））。また、光中の注釈は保孝より以前におこなわれていたことも考察されていることから、成章がもちいた「岡本氏蔵書」がそもそも光中の校訂した本文であったという成立過程も想定できる。

以上から、本書が浚明本の様相を呈しつつ、保孝『考』の原型でもあり、さらに光中による本文の特徴をも持ち合わせているという、非常に特殊な性質をもつ本であることがわかる。今後さらに墨書注や本文の異同の調査を含めた、詳細な研究がおこなわれることを期待したい。